

「  
W  
i  
l  
d  
S  
c  
d  
T  
a  
r  
r  
i  
l  
g  
e  
g  
t  
e  
r  
」

竹  
内  
弾  
正

## 【あらすじ】

捜査一課刑事・藤原春海は、孤独死した男性の自宅を捜査中、あるものを発見する。それは瓶詰にされた少年の性器だった。DNA鑑定の結果、その性器は25年前に殺害された小学生のものだと発覚する。警察は当初隣町に住む青年を逮捕するも拘留中に自殺。被疑者死亡で書類送検され事件は解決したと思われていた。しかし春海が見つけた証拠によりその事実は覆り、県警は25年経って犯人の誤認逮捕・冤罪を公表。一連の騒動は『駒沢冤罪事件』と呼ばれ世間を賑わせた。そして、それがトリガーであるかのように管内で不気味な事件が発生する。赤い花を描いたように手で伸ばされた血痕。その中心に置かれた、四肢が切断された遺体。これは怨恨か、無差別のサイコパスか。捜査官の間でも意見がわかれ、進展がない。また、春海はプライベートでも1つの問題を抱えていた。恋人から2人で暮らす家を建てようと言われても、父親が自殺した過去が忘れられず、素直に頷けないのだ。そんな中、2人目・3人目の被害者が発生する。春海は一連の事件が冤罪事件の殺害状況に『寄せて』いることに気付く。被害者3名は冤罪事件の被害少年と同じサッカーチームに所属し、当時少年を虐めていた過去が発覚。また、冤罪容疑で自殺した青年の遺体記録からも防衛創が新たに見つかる。疑わしいのは当時の担当刑事。内1名は春海の父親。そんな中、当時の担当刑事たちが誘拐。春海自身も誘拐されてしまう。辿り着いたのは冤罪の被害者・斉藤が通所していた障害者施設の廃墟。犯人は当時斉藤を盲目的に愛していた施設職員。彼は、冤罪発覚後にある女性に巡り合った。女性は今時、事件の一部始終を目撃。つまり斉藤が冤罪であることを証明できたはずの人間だった。その事実を知った彼は斉藤の死の起因となった人間を殺し始める。それは斉藤の死の起因となった

真相だった。また、斉藤自身も自殺ではなく担当刑事の暴行により死亡。隠蔽に手を貸した春海の父は口封じの為殺害されていた。父親の代わりとして犯人に殺されそうになる春海。しかし寸での所で捜査官たちが突入。犯人は逮捕。そうして25年前続いた事件を終わらせた春海は、今度は自分から恋人に「家がほしい」と微笑むのだった。

【登場人物表】

藤原 春海（35・10）捜査課刑事。春海の恋人

海堂 広斗（35）公安課刑事。

近藤 誠（53）捜査課刑事

九条 義臣（33）捜査課刑事

竹内 将兵（36）捜査課刑事

霧島 豊（34）捜査課刑事

藤原 久（享年43）春海の父。元刑事

藤原 千代香（67・42）春海の母

藤原 ミツ（70）春海の祖母

藤原 夏美（32・7）春海の妹

藤原 虎太郎（7）夏美の息子

高槻 昇（享年10）殺人事件被害者

斉藤 旭（享年20）冤罪被害者

斉藤 敦子（66）旭の叔母

白崎 秀龍（46）施設職員

稲垣 紘一（65・40）殺人事件真犯人

辻岡 恵子（35・10）昇のチームメイト

佐々木 良（35・10）昇のチームメイト

的場 優（35・10）昇のチームメイト

吉村 賢治（35・10）昇のチームメイト

久慈 誠也（33）昇のチームメイト

松村 玄司（65）冤罪事件担当刑事

キャスター 1

キャスター 2

レポーター

警察官 1

警察官 2

佐々木 良の父

佐々木 良の母

若者 1

若者 2

○ 一戸建て住宅・外観  
昭和風の古い物件。  
住宅を取り囲むパトカー。  
行き交う捜査官たち。

○ 同・和室  
布団の上の腐乱死体。  
ハエの羽音。

藤原春海（35）、手袋を嵌めながら入室。遺体の前に屈み手を合わせる。  
九条義臣（33）、春海の横に屈む。  
九条「数日前から腐敗臭が酷くて近所の住民が通報を」  
春海、辺りを見渡す。

室内に散乱するゴミ。  
春海「まさかゴミじゃなくて人間が腐ってるとは思わなかっただろうな」

警察官1「藤原さん、春海に近付く。」

警察官1「藤原さん、2階に変なものが」  
春海「（訝し気に）変なもの？」

○ 同・階段  
小走りで駆け上る春海、九条。

○ 同・2階  
春海、九条、入室。

敬礼する警察官たち。

カーテンが閉められた薄暗い空間。

壁一面の児童ポルノポスター。蝶、蛹

の標本。積み上げられたビデオテープ。

床に散乱する瓶。

春海「（溜息）これだもん。俺、孤独死だけ

は絶対にヤダ」

九条「人に見られて困るものがなければ問題

ないはずですよ」

春海「（九条を小突いて）なんだよ、その疑

わしい目は」

春海、足元の瓶を倒す。

春海「おっと」  
瓶を手に取る春海。中を凝視。

春海「これ……」  
瓶詰の少年の性器。

○タイトル  
W i l d S c a r l e t T r i g g e r

○ニュース

キャスター1「駒沢市の廃墟で当時10歳だった高槻昇君が殺害された事件から今日で25年です。今年3月、楠野市で孤独死した男性の自宅から、高槻昇君の遺体の一部が発見されたことで、事件は急展開を迎えました」

○ニュース・謝罪会見の現場

会場を背に説明する警察関係者たち。

レポーター「こちらでは先ほどから県警による謝罪会見が行われています」

レポーター「この事件は、25年前駒沢市にある廃墟旅館で、当時小学生であった高槻

昇君が何者かに殺害された事件です。警察は当初、隣町に住む軽度の知的障害者、斉藤旭さん当時20歳を逮捕しましたが、拘留中に自殺。事件は被疑者死亡のまま書類送検されていきました。しかし、今年3月、駒沢市の隣接した楠野市で孤独死した65歳男性の自宅から、高槻昇君の遺体の一部と、犯行を記録したとみられる日記が発見。これにより、県警は男性を高槻昇君殺害の犯人と断定。斉藤旭さんの逮捕は冤罪であったことを公表し本日正式に謝罪しました」

○ラーメン屋・カウンター

賑わう店内。  
ニュースを放送するテレビ。  
カウンターに座る春海。テレビを見ながらラーメンを食べる。

キャスター1の声「この事件、当時の杜撰な  
 捜査手法が浮き彫りになりましたね」  
 キャスター2の声「そうですね。事件から2  
 5年経ちようやく真実が明るみになったと。  
 拘留中に死亡した斉藤旭さんのお気持ちを  
 考えると、無念というか――」  
 男の声「何を呆けてるんだ」  
 春海「隣の席を見る。」  
 海堂「海堂広斗（35）、座る。」  
 海堂「飯食いながら寝るなよ」  
 海堂「食堂、食券を店員に渡す。」  
 春海「（バツが悪そうに）うるせ」  
 春海「（バツが悪そうに）うるせ」  
 春海「……あれ、結局どうなった？ もうお  
 沙汰は下ったのか？」  
 海堂「（テレビを一瞥し）ああ、冤罪に関わ  
 った関係者については処分相当だよ。担  
 当してた人間は全員退職してるからな。退  
 職時の給料から減給相当額を自主返納って  
 ことで落ち着いたらしい」  
 春海「ふうん。……うちにもきたらどうしよ  
 う。なあ広斗」  
 海堂「誠心誠意、返納しろよ。念入りに徴収  
 するように言っとくから」  
 春海「てめえ」  
 春海「春海のスマホが鳴る。電話に出る。」  
 春海「あいよ。ああ、うん？ ……マジか」  
 海堂「春海の井からチャイシューを取  
 り自分の井に入れる。」  
 電話を切る春海。  
 春海「（呆れて）お前ね」  
 海堂「（呼び出したろ？ もったいない」  
 春海「（悔しそうに）覚えてろよ」  
 海堂「笑ってチャイシューを食べる。」  
 席を立つ春海。

○2階建てアパート・外観  
 取り囲むパトカー。  
 運び込まれるブルーシート。

○同・駐車場  
パトカー到着。  
降りる九条、春海。小走りの中へ。

○同・202号室・居間  
入室する春海、九条。  
近藤誠（53）、手招きする。

近藤「遅いぞ」

春海「すません」

九条「すいません」

春海「（辺りを見渡して）にしても……」

居間の中央。フローリングの床に赤い  
花を描いたように手で伸ばされた血痕。

その中央に置かれた佐々木良（35）  
の死体。手足は切断され芋虫のよう。

春海「すごいですね」

九条「（舌打ちして）どのサイコ野郎です  
かね」

近藤「第一発見者は母親。連絡が付かなくて  
様子を見に来たらしい」

春海、遺体に近付き屈む。

遺体の胸部に無数の刺し傷。

春海「手足は……」

九条「（部屋の隅を見ながら）あれですかね」

部屋の壁に寄せられているソファ、テ  
ーブル、テレビ、切断された手足。

春海「（溜息）キャンバスにはいらなかった  
ってか」

近藤「大した芸術家がいたもんだ。とりあえ  
ず近隣への聞き込みを開始してくれ」

春海・九条「はい」

○県警・外観

○同・捜査一課

ホワイトボードの前に立つ近藤。

近藤「被害者の氏名は佐々木良。35歳。運  
送会社勤務。死因は背後から心臓を貫通す  
る刺し傷。四肢の切断は死亡後である可能

性が高い」

椅子に座り近藤を見る春海。

近藤「隣に座る竹内将兵（36）。」

また、玄関には無数の血痕。おそらく帰宅

して室内に入る直前に背後から刺殺された

ものとみられる」

竹内「竹内、春海に顔を寄せる。」

春海「（怨恨と無差別どっちだと思おう？）」

春海「（考え込んで）どっちでしょうね……」

九条「死亡推定時刻、両隣は在宅でした。無

差別ならそこを気にしないわけがないです

し、やはり怨恨では？」

春海「そう思うんだが。そもそもあそこまで

飾り付ける意味がわからない」

竹内「確かに。まるでお花の上の芋虫だ」

竹内「状況的には怨恨に近いが、殺し方が無

差別のサイコパスに近い」

春海「ちぐはぐですね」

九条「確かに……」

春海「ホワイボードを見つめる。」

○ 佐々木良の実家・門前

『佐々木』の表札。

○ 同・玄関

春海、九条、聞き込み中。

九条「では、良さんがご実家近くに引越して

きたのはつい最近なんですネ」

佐々木良の父「はい。離婚して、それで……」

佐々木良の母「家に戻ってきてもいいって言

ったのに、そうしたらよかったのに……！」

佐々木良の父「母さん……」

九条「良さんの普段の帰宅時間というのは、

おふたりはご存じでしたか」

佐々木良の父「残業が多いらしくて、大体9

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

時位だと。終わったらすぐに家に帰って寝

てしまうから、どこかに遊びに行く余裕もないと前に言っていました」

九条、春海、アイコンタクト。

○同・門前

駐車した覆面パトカーに近づく春海、九条。

春海「……やはり犯人は佐々木の動向を粗方把握して、帰宅時を狙った可能性があるな」

九条「となるとやはり怨恨ですかね」

春海「離婚した元妻はどうだった」

九条「……アリバイが立証されたそうで、空振りでした」

春海「（暫し考え込み）一旦署に戻るぞ」

九条「はい」

九条、運転席に乗り込む。

春海、助手席のドアを開く。視線を前方へ向ける。動きを止める。

○廃墟旅館・外観（1キロ先）

木々の合間に建つ10階建て廃墟旅館。コンクリート壁。窓ガラスはすべて割れている。

○佐々木良の実家・門前

廃墟旅館を見つめる春海。

春海「（眉を顰め）……こんなに近いのか」

九条、車内から春海を見上げる。

九条「藤さん？何か気になることでも？」

春海「（顎で指し）あれだ。駒沢冤罪事件の」

九条「（前方を見て）え、あれですか」

春海「ああ」

春海、前を見つめる。

春海「（そっぴいあ、生きてたら同い年か……」

九条「藤さん？」

春海「（我に返って）悪い。行くか」

九条「あ、はい」

乗り込む春海。ドアが閉まる。

○住宅街

走り出す覆面パトカー。

○走行中の覆面パトカー

運転する九条。

春海、廃墟旅館を見つめる。

九条「25年前でしたよね」

春海「ああ」

九条「そういえば藤さんのお父さんも刑事だったんですね。当時の話とかも聞いてたんですか」

春海「いや、もう死んでるからな」

九条「え！あ、すいません」

春海「気にすんな。子供の頃だ」

春海、遠くを見る。

○住宅街

路肩に駐車中の黒いバン。

覆面パトカー通過後、走り去る。

○春海のマンション・玄関（夜）

春海、ドアを開く。片手に弁当の入ったレジ袋。

○同・リビング（夜）

明かりは点けず暗闇のまま。

春海、部屋に入りネクタイを緩める。

背後に立つ人影。

春海、振り返る。

背後に立つ海堂。スウェット姿。

春海「（驚いて）うおおおおおい！」

海堂「（驚いて）うお！なんだよ！」

春海「こっちの台詞だ！声掛けろよお前！」

海堂「寝てた」

春海「（脱力して）びっくりさせんなよ……」

海堂「すまん」

春海、リビングの明かりを点ける。

春海「来るなら来るって連絡しろっていつも言ってるだろ」

海堂「（欠伸しながら）心の中で、した」

春海「（呆れて）届いてねえなあ……。まあ

いいや。自分の飯しか買って来てねえけど  
 半分食うか？」  
 春海「あぁ、もらう。……最近俺より遅いな」  
 海堂「おかげ様で商売繁盛だよ」  
 春海「嬉しくねえな」  
 春海「全くだ」  
 春海「レジ袋をテーブルへ置こうとして動きを止める。  
 テーブルの上に積まれた住宅情報雑誌。  
 海堂「座る。春海を見上げる。  
 春海「座る。雑誌をテーブルの下へ。  
 海堂「（ムツとして）なんで寄せるんだよ」  
 春海「いや邪魔だし」  
 海堂「邪魔じゃねえよ。見ろよ」  
 春海「春海、溜息。弁当を広げる。  
 春海「腹減ってんだよ」  
 海堂「どんどん貯まってくぞ、それ」  
 春海「貯めるな。前も言っただろ。家は買わない。今だって一緒に住んでるようなもんなんだから、別にわざわざ家なんて建てなくていい」  
 海堂「ここはお前の家で、たまに俺が押しつけてるだけだな」  
 春海「たまにか。昨日もここに座ってたけどな、お前」  
 海堂「ほぼ毎日」  
 春海「言い直せばいいってもんじゃねえぞ」  
 海堂「ならもう、一緒に暮らす家を買ったっていいだろ」  
 春海「……広斗」  
 海堂「俺たちもう何年この状態だ？別に力ミングアウトしてえとか、籍入れてえとかは思っただろ。一緒に住む家ぐらい持ちてえねえだろ。一緒に住む家ぐらい持ちてえ」  
 春海「広斗。……家なんてもんは、建てたら後が大変なんだぞ。やっぱり別れるとか、出て行きたいってことになったって簡単に海堂「（睨み）別れる予定があるのか」

春海「（狼狽えて）いや、そうじゃなくて」  
海堂「そんなことを言ったら何もできねえ  
だろ」

春海、俯いて口籠る。  
海堂「（溜息）……もういい」

海堂、立ち上がり、隣の部屋へ。ドア  
が閉まる。

春海、弁当に視線を戻し溜息。

海堂、隣の部屋から勢いよく出てくる。  
春海「（驚いて）うお！？……え？」

海堂、手に住宅情報雑誌の山。近づく。  
弁当を床に置く。テーブルに雑誌を置  
く。床に置いた弁当を持つ。隣の部屋  
へ戻る。ドアが閉まる。  
固まる春海。

○同・外観（夜）

春海の怒号「弁当返せよ！」  
犬の遠吠え。

○住宅街（深夜）

○2階建住宅・玄関前（深夜）

『的場』の表札。  
玄関をピッキングする覆面の男（白崎  
秀龍（46）、以下白崎と表記）

○同・玄関（深夜）

扉が音もなく開く。  
忍び込む白崎。ポケットからスタンガ  
ンを取り出す。階段を上る。  
階段が軋む音とスタンガンの放電音。  
一拍置いて複数の悲鳴。

○住宅街（朝）

走り抜けるパトカー。

○2階建住宅・1階居間（朝）

行き交う捜査官たち。  
居間の中央。フローリングの床に赤い

花を描いたように手で伸ばされた血痕。  
 その中央に置かれた場的場優（35）の  
 死体。手足は切断された芋虫のよう。  
 室内隅に寄せられたテレビ、ソファ、  
 ダイニングテーブル、椅子、絨毯。切  
 断された手足。  
 竹内、遺体の前に屈み、手を伸ばす。  
 竹内「（陰しい顔で舌打ち）……」  
 春海の声「竹内さん」  
 竹内、振り向く。  
 春海、近寄る。  
 春海「佐々木良と同じですね」  
 竹内「ああ」  
 竹内、春海、死体を見つめる。

# ○ 県警・外観

## ○ 同・捜査一課

ホワイボードに貼られた現場写真。  
 デスクに腰をかけて腕を組む近藤。

竹内「被害者の氏名は的場優。35歳。製薬

会社勤務。死因は胸部から背中へ貫通する  
 刺し傷。それから額に、スタンガンによる  
 ものと思しき火傷痕がありました。寝室で  
 絶命していた妻と子も同じです。おそらく  
 全員の動きを封じ、その後殺害に及んだも  
 のかと」

近藤「そして、的場の遺体だけを居間に運んで  
 飾り付けた、か」

春海、思案気。

九条「被害者の共通点、見つかりました」

九条「佐々木良と、的場優は小学生時代、同じ

サッカークラブに所属していました。地域

主催のサッカーチームで、チーム名はスト

ライカーズ駒沢」

春海、目を見開く。

近藤「スライカーズ駒沢……聞いたことがあるな」

春海「近藤さん、それに近づく。高槻昇が所属していたチームです。そうだろ？ 九条」

九条「（重々しく頷いて）はい」

近藤「（苦々しく）駒沢冤罪事件か……」

○25年前・廃墟旅館・1階・宴会場跡

九条の声「25年前、駒沢市の廃墟旅館で当時小学生であつた高槻昇が何者かに殺害。遺体には著しい損壊がみられた」

円を描くような血だまり。その中央に置かれた高槻昇（10）の死体。手足は逆方向に折れ曲がっている。右手は手首から、左足は膝から切断され無造作に転がっている。性器も切断。顔は左を向いている。

○25年前・県警・留置所

九条の声「警察は当初、隣町に住む軽度の知的障害者・斉藤旭20歳を逮捕。だが斉藤は拘留中にパニック状態となり、自傷行為の末に死亡。結局被疑者死亡のまま送検された」

旭、暴れる。壁に頭を叩きつける。

○現在・同・捜査一課

近藤「……近藤、溜息を吐き頭を搔きむしる。

市で孤独死した稲垣紘一・65歳の自宅から、瓶詰にされた性器が見つかった。DNA鑑定の結果、25年前に死亡した高槻昇のものとは一致。また、殺害を仄めかす手記も発見。つまり斉藤旭は冤罪であり、高槻昇殺害の犯人は稲垣紘一だった。……やつと報道が落ち着いてきたところだったのに。

なあ、藤」

春海、苦笑。

霧島「霧島豊（34）、密かに竹内に質問。

竹内「当時事件を担当した1人が藤の親父さ

んなんだよ。そこで瓶詰を見つけたのが藤

だろ。何、知らなかったのお前」

霧島「知らなかったです……」

九条「九条、霧島と竹内を横目で見る。

九条「しかし、チームメイトだというだけで、

現時点それ以外に駒沢冤罪事件に関連する

ものはありません」

春海「いや、あるだろう」

九条「なんですか」

春海、ホワイトボードを顎で指す。

九条、怪訝にホワイトボードを見る。

近藤「死体だ」

春海「血だまりの中心に置かれた死体。損壊

された四肢。両者の死亡時の状況は、高槻

昇の死亡状況と酷似している」

近藤「（重い溜息）嫌な予感です。……」

竹内「考えられるのは模倣犯か……」

九条「確かに、高槻昇の発見時の状況は当時

マスコミ各社が大体的に取り上げています。

模倣も容易ですね」

春海「だが、模倣犯だとして、わざわざ当時

の被害者と縁がある人間を選ぶか？ そんな

な人間を選び、事件を模倣した殺し方をす

るなら、あの事件に対するなんらかの怨恨が

あると考えるのが自然だ」

近藤「怨恨か……。斉藤旭の両親は確か……」

春海「息子の49日後に心中しています。親

戚もいますが、冤罪発表後も特に不穏な動

きは見られませんでした」

近藤「（考えて……）引き続き被害者たちの

人間関係を重点的に洗ってくれ」

○同・捜査一課（夜）

消灯中。春海のデスクライトのみ点灯。

春海、調書の束を見つめる。

机 上 には 高 槻 昇 の 生 前 の 写 真 。 死 亡 時  
の 写 真 。 駒 沢 廃 墟 旅 館 の 写 真 。  
春 海 M 「 事 件 当 時 旅 館 は す で に 廃 墟 と な っ て  
い た 。 高 槻 昇 が そ こ に 立 ち 入 っ た 経 緯 は 不  
明 の ま ま 」

春 海 M 「 春 海 、 書 類 を 捲 る 。  
春 海 M 「 稲 垣 紘 一 の 日 記 …… 」

#### ○ 稲 垣 紘 一 の 日 記

以 下 、 鉛 筆 で 書 か れ た 独 白 。  
「 ま た や っ て し ま っ た 。 駄 目 だ と わ か  
っ て い て も 胸 が 高 鳴 る 。 ど う し て こ ん  
な に も 興 奮 す る の だ ろ う 」  
「 羽 ば た き 方 を 覚 え た ば か り の 美 し い  
蝶 の 羽 を 千 切 っ て 蛹 に 戻 す 。 花 の 上 に  
横 た わ る 蛹 の 、 羽 化 す る 直 前 に 戻 っ た  
そ の 醜 怪 な 有 様 が 、 な ん と も 淫 ら で 、  
背 中 を 虫 が 這 う よ う な 快 感 を 感 じ る 」  
「 子 供 の 悲 鳴 が 聞 こ え た 。 足 音 も 。 追  
い か け た が 誰 も い な か っ た 。 慌 て て 逃  
げ た 。 あ れ は 幻 だ ろ う か 。 わ か ら な い 」

#### ○ 県 警 ・ 捜 査 一 課 ( 夜 )

春 海 、 調 書 を 捲 る 。

春 海 「 ( 舌 打 ち ) 変 態 が 」

調 書 の 担 当 者 名 「 藤 原 久 」 「 枚 方 重 蔵 」  
「 権 藤 孝 雄 」 「 松 村 玄 司 」。

春 海 、 「 藤 原 久 」 の 名 前 を な ぞ る 。

春 海 「 ま さ か 父 親 が 起 こ し た 冤 罪 事 件 に 関 わ  
る な ん て な …… 」

春 海 、 天 井 を 仰 ぐ 。

春 海 M 「 碌 に 話 を し た こ と も な か っ た 。 ほ と  
ん ど 家 に い な か っ た し 、 そ れ に …… 」

#### ○ 2 5 年 前 ・ 春 海 の 実 家 ・ 居 間

鼻 血 を 流 し 床 に 座 り 込 む 春 海 ( 1 0 ) 。

藤 原 久 ( 4 3 ) 、 拳 を 振 り 上 げ 春 海 を

睨 む 。

久 「 ふ ざ け る な ! 」

藤 原 千 代 香 ( 4 2 ) 、 久 を 抑 え る 。

千代香「子供の言う事でしよう！　なんでこんなこと！」

久「言っている事と悪いことがあるだろう！　お前は何をやっているんだ！」

揉みあう久、千代香。  
呆然と見上げる春海。

久「……もういい！」  
久、千代香を振り払い、出て行く。

千代香「あなた！」  
春海「お母さん……」

千代香「お母さん……」  
抱きしめる。  
千代香「大丈夫、大丈夫よ。怖かったね」

春海「泣く。」

○現在・県警・捜査一課（夜）

海堂の声「おい？　春海」  
春海、入口を見る。

海堂「お前、まだやってんのか」  
春海「まあな。おかげでお前のお勧めの雑誌

を見る時間もねえよ」  
海堂「（鼻で嗤って）引き出し開けてみるよ」

春海「おい！」  
誌が入っている。  
住宅情報雑誌

春海「おい！」  
海堂「笑って隣のデスクに腰かける。」

海堂「公安は関係ねえよ。聞いたぜ。今回の被害者、あの高槻昇の関係者だってな」

春海「ああ」  
海堂「（溜息）やっと一段落ついてきたと思

ったのにな」  
春海「近藤さんも似たようなことを言ってた

よ」  
海堂「……冤罪事件と関係あると思うか？」

春海「あの殺害状況をみればな。あれは間違

いなく高槻昇の状況に寄せている。……多

分、今回の一連の事件のトリガーは、3月

海 堂「何かって何だよ？」  
の冤罪発覚だ。そこに何らかの理由がある」

春 海「（かわいく）僕わからない」

海 堂「ぶっ飛ばすぞ」

春 海「怖いねえ」

海 堂「（溜息）：：過去の件は俺の方でもう  
1 回調べておく。お前は連続殺人事件に集  
中しろ。：：帰るぞ」

海 堂「立ち上がる。廊下へ向かう。  
春 海「デスクランプを消して、海堂の  
後を追う。」

○ 同・同・春海のデスク上（夜）

2 つの写真が並ぶ。

俯瞰から撮られた高槻昇の遺体の写真。  
土下座したまま死亡した斉藤旭の写真。

○ 住宅街

聞き込みをする春海、九条。

○ 駐車中の覆面パトカー・車内

春 海「佐々木も、現場も、当時は成績優秀、人当

たりもよく、生徒たちの間でも人気だった。  
今で言う一軍みたいなものか」

九 条「そのようですね。でも学校が違うせい  
か、2 人一緒にいるところを見た人間は見

つかりません。チームが同じなだけで、当  
人同士はそれほど交流はなかったんでしょ

うか」

春 海「可能性はあるな。そっちは竹内さんが

洗ってるんだっか」  
九 条「はい。しかし事件の後 1 年足らずで解

散してますからね。なかなか難しいみたい  
です」

春 海「調べ終わる頃にはサッカーチームのメ  
ンバーが全員殺されてるんじゃないか」

九 条「やめてくださいよ」  
九 条「車を走らせる。」

○住宅街

走行する覆面パトカー。

○走行中の覆面パトカー・車内

前方を見て顔を顰める春海。

○廃墟旅館・外観（１キロ先）

○走行中の覆面パトカー・車内

春海を横目で見る九条。

九条「……寄ってみますか？ あそこ」

九条「気になって仕方ないって感じですよ、

藤さん」

春海「……ああ」

○廃墟旅館・正面玄関前

壁や柱は剥き出しのコンクリート。

玄関前に『立ち入り禁止』の看板。

駐車する覆面パトカー。

○同・１階・ロビー

春海、九条、辺りを見渡しながら進む。

○同・同・宴会場跡

扉、窓ガラスはなく枠のみ。

壁際に積みあがるテーブルや椅子。

春海、九条、会場の中心へ立つ。

床に微かに残る血痕。

春海「……ここか」

春海、ポケットから写真を取り出す。

見ながら寝そべる。

春海「……こうか」

九条「（ぎよっとして）何してるんですか、

藤さん」

春海「気になってたんだよ」

九条「（嫌そうな顔をして）だからって……」

春海、左を向く。

隅に転がる横倒しの錆びたロッカー。

春海 「あれは……」

春海、立ち上がる。ロッカーに近づく。

九条 「（覗き込んで）従業員用ですかね」

春海 「多分な」

春海、扉の裏面を見る。

小さな爪痕。

春海 「（思案顔）……」

遠くから人の声。

春海、九条、入口を見る。

○ 同・2階・廊下

肝試し中の若者1・若者2。撮影中。

九条 「こら、こんなところで何をしている」

若者1・若者2、叫んで逃げる。

追う九条。

○ 同・階段

駆け下りる若者1・若者2。

春海、踊り場に立って道を塞ぐ。

春海 「はい、そこまで」。残念」

若者1・若者2、項垂れる。

○ 同・正面玄関前

駐車する覆面パトカー。

若者1・若者2に説教をする九条。

九条 「動画で紹介されてる？」

若者1 「そうなんです。それで、1回見に行

こうって話になって……」

九条 「だからって無断で侵入したら駄目だろ

う」

春海 「（真似して）駄目だろう」

九条、春海を睨む。

春海 「（わざとらしく咳払い）ちなみにその

動画って、どんなやつ？」

若者2 「これです」

若者2、スマホを春海に見せる。

○ 動画

深夜の廃墟旅館内部。

宴会場跡の血痕を映す。

字幕「ここには殺人鬼への生贄にされた子供の霊が彷徨っている」

画面が変わる。当時の駒沢ストライカーズの集合写真。

○ 廃墟旅館・正面玄関前

春海「スマホを見つめる春海、九条。

前：「生贄にされた子供、か。配信日は1年

前：「

九条「この時点での殺人鬼って斉藤旭のことですよね」

春海「冤罪発覚以前だからな。ただ、この写真をどこで手に入れたかが気になる」

九条「部外者が簡単に手に入られるもので

はないですね。配信者を調べますか」

春海「ああ」

○ マンション・8階・外廊下

『803 K U J I』の表札。

○ 同・同・803号室・居間

ソファに座る久慈誠也（33）。

久慈「向かいに座る春海、九条。

久慈「びっくりしましたよ。まさかあれが冤罪事件だったなんて」

九条「あの動画は去年配信したものですよね」

久慈「そうですね。ネタを探してて丁度いいな

と思つて。僕、高槻昇と同じサッカーチ

ムだったんですよ。と言つても年が違ひ、

入ったばかりであの事件が起こつたんで、

あんまり接点はなかったんですけど」

春海、九条、顔を見合わせる。

九条「高槻昇君はどんな子だったか覚えてい

ますか？」

久慈「うーん。大人しい子って印象ですね」

九条「彼はよくあの廃墟旅館に行つていたん

ですか？ 探検とか、肝試しとかで」

久慈「（笑つて）まさか。あの頃からあの旅

館はお化けとか変質者がでるって有名でしたし、誰も近付きませんでしたよ」

九条「変質者というのは……」

久慈「小児性愛者、っていうんですかね。小さい子供を連れ込んでよくないことをする大人がいるって噂はありました。実際に見たことはないですけど」

春海「思案顔。」

久慈「だから、今思えば誰かに虐められて連れていかれてたんじゃないかなって思うんですよ」

春海「虐め？」

久慈「はい。一度だけ、練習の帰り道に彼が虐められていたのを見たことがあって」

春海「誰に？」

久慈「名前は……憶えてないですねえ。彼と同じ学年の子だったと思うんですけど」

春海「なら、人数は？」

久慈「3人かな。バックを投げられたり、突き飛ばされたり、引き摺られたりしてて」

九条「その子たちは、動画にアップされている写真にも写っていますか？　そこから名前がわかったりとか……」

久慈「母がわかるかもしれません。聞いてみましょうか」

九条「お願いします」

久慈「電話をかけ始める。」

春海「スマホが鳴る。」

春海「（受話）はい。……え？」

○市営団地・外観（夕）

行き交う捜査官たち。

周りに集まりスマホを翳す野次馬。

○同・4階・エレベーター前

ドアが開く。降りる春海、九条。

○同・同・405号室・玄関

『吉村』の表札。

春海、九条、捜査官に挨拶をして中へ。

扉にはピッキングの跡。  
春海、眉根を寄せて流し見る。

○同・同・居間

大勢の捜査官。

居間の中央。フローリングの床に赤い花を描いたように手で伸ばされた血痕。中央に置かれた吉村賢治（35）の腐乱死体。手足は切断され芋虫のよう。室内隅に寄せられたテレビ、テーブル、絨毯。切断された手足。

春海「3人目の被害者が出る前にと考えたが

：「私も遅すぎたのか」

九条、隣室を覗く。

○同・同・和室

布団に横たわる年配女性の腐乱死体。

○県警・捜査一課（夜）

ホワイトボードに貼られた現場写真。

九条「吉村賢治、35歳。無職。両親は離婚

し、母親と二人暮らし。長らく引きこもり

であり、母親の年金で暮らしていたようで

す。近隣住民とも交流がなかったため発見が遅

れたものと思われます」

近藤「死体の状況から見ると殺害されたのは

佐々木、的場よりも前だな」

竹内「サッカーチームの名簿に吉村の名前も

ありました。それから動画配信者の久慈誠

也にも確認しましたが、高槻昇を虐めてい

たのはこの3人で間違いないそうです」

近藤「：「普段誰も立ち入らない廃墟旅館に

何故か侵入した高槻昇。サッカー練習の帰

りに彼を虐めていた佐々木、的場、吉村か」

春海「一つ、気になることが」

近藤「なんだ？」

春海「稲垣紘一の日記です」

春海、書類を近藤へ渡す。

近藤「近藤、読み上げる。」  
近藤「子供の悲鳴が聞こえた。足音も。追いかけたが誰もいなかった。慌てて逃げた。あれは幻だろうか。わからない」  
竹内「……ということは、事件当時、目撃者がいたってことか」  
春海「稲垣紘一の幻覚でないのならそうなります」  
近藤「当時の調書を見た限りでは目撃者はゼロだった。もしこれが事実であれば……」  
春海「その人間は、高槻昇の殺害現場を目撃したにも関わらず通報をせず、見殺しにしていた可能性がります。また、斉藤旭が犯人ではないことを知っていたながら黙秘をしていた可能性も」  
近藤「それが佐々木、的場、吉村だと？」  
春海「可能性は、あります」  
近藤「よし、当時のサッカ―チームの関係者中心に洗い直せ。保護者や近隣住民の目撃情報もだ」  
捜査官一同、返事をして動き出す。  
春海、手元の書類をじっと見る。

#### ○コンビニ・正面（夜）

レジ袋を片手に出てくる春海。腕時計を見る。午後9時。

#### ○道路（夜）

まばらな街灯。人通りはない。歩く春海。天を仰いで溜息。

春海「（独り言）ああ、疲れた。たまにはあいつが飯作っててくんねえかな……いや、無理だな」

女の声「兄さん！」

春海、振り向く。

藤原夏美（32）、藤原虎太郎（7）、手を繋ぎ歩いてくる。

春海「夏美！ 虎太郎！」

虎太郎「春海おじさん！」

虎太郎、春海に抱き着く。

春海「おお！ 虎太郎！ 会いたかったあ」

夏美「なんか疲れ切ったおっさんが前を歩いてるね」  
「うって虎太郎と話してたら、兄さんだった」

春海「（つつこみ）おい！」

虎太郎「（×××）おい！」  
虎太郎を抱っこして歩く春海。

春海「こんな時間に出歩くなよ。不用心だろ」  
夏美「だって、どうしてもアイスが食べたくなっちゃって」

虎太郎「（真似して）なっちゃって」  
春海「ったく、親子そろって食い意地が張っちゃまって」

虎太郎「もそもそ動く。春海のスーツを珍しそうに触る。」  
春海「気にせず夏美と会話。」

夏美「今、仕事大変なんだって？ ニュースでしょ」  
「ちゅう報道してるよ」

春海「まあな。そっちはどうだ？ 新しい職場には慣れたか」  
夏美「うん。もうすっかり。虎太郎も友達い

つぱいできたって。ね」  
春海「おお？ そうなのか虎太郎」  
虎太郎「そうなの！ いっぱい！」

春海「そうかあ！ よかったなあ！」  
虎太郎「うん！」

○春海の実家・玄関（夜）  
中に入る虎太郎。  
玄関先で話をする春海、夏美。

夏美「寄っていかないの？ 母さんもまだ起きてるよ」  
春海「また今度にするよ。それよりきちんと戸締りしろよ。最近物騒だから」

夏美「本当にね。頼みますよ刑事さん」  
春海「こいつ！」

春海「夏美の頭を小突く。」  
笑い合う二人。

春海「困ったことがあったら、すぐに連絡しろよ」

夏美「うん、ありがとう」

自嘲する夏美。

夏美「……変なもんだよね。あんなに、二度と戻るもんかって思ってたところに戻ってきてくるなんてさ」

春海「……」

春海、夏美の頭を軽く叩く。

春海「そんな言い方すんなよ。ばあさんだってもう死んでいないんだ。あの頃と違って安心して暮らせるだろ」

夏美「（複雑な顔）……うん」

春海「じゃあな。おやすみ」

○道路（夜）

歩く春海。振り返る。

○春海の実家・外觀・10メートル先（夜）

玄関灯が消える。

○道路（夜）

春海、目を伏せる。

○25年前・春海の実家・居間

鼻血を流し床に座り込む春海（10）。久（43）、千代香（42）を振り払う。出て行く。

春海M「……ほとんど家にいなかった親父が

出て行って、それからあまり時間は経って  
いなかったと思う」

○25年前・同・玄関

玄関に立つ警察官2人。

千代香「あちにくす千代香（42）」

警察官2「あの人が、自殺……」

藤原ミツ（70）、崩れ落ちる。慟哭。

見つめる春海（10）、夏美（7）。

○ 25 年前・同・居間

ミツ「あんたのせいだよ！ 久が苦しんで

のも気付かないで！ あんたがしっかりし

ていたら今頃あの子は！」

千代香「無言で床を片付ける。

ミツ「あんたたちもあっち行きな！ 顔も見

たくない！」

夏美「お兄ちゃん！」

千代香「お義母さん！ やめてください！」

ミツ「黙れ！」

○ 25 年前・同・同（夜）

真つ暗な部屋。

千代香「電話をする千代香。

けなないし、子供たちの学校だつてあるし。

それに家だつて建てたばかりで……」

春海（10）、廊下から様子を窺う。

○ 現在・道路（夜）

春海「溜息を吐く春海。天を仰ぐ。

春海「（呟く）家なんて、なあ……」

○ 春海のマンション・正面入り口（夜）

中に入る春海。

○ 同・外廊下（夜）

鍵穴に鍵を差し込む春海。

背後に人影。

春海「振り向く。

白崎「パーカーにサングラス、マスク

姿。春海の額にスタンガンを当てる。

春海「呻いて倒れる。

○ 春海の実家・居間（夜）

ソファに座る虎太郎。警察手帳を見る。

夏美「虎太郎、そろそろ歯磨きするよ」

虎太郎「はい」

夏美「は！警察手帳に気付く。

もしかして春海おじさんの！？　これ、

虎太郎「うん！」

夏美「嘘でしょ！　持ってたの！？」

○春海のマンション・外廊下（夜）

白崎、スタングンをポケットに仕舞う。

春海の襟足を持つ。

春海、室内へと引き摺られる。

玄関の扉が閉まる。

○同・玄関（夜）

真っ暗な室内。

春海を引き摺る白崎。

春海、白崎の脛に噛みつく。

白崎、呻く。

揉みあう春海、白崎。

春海、玄関扉に叩きつけられる。

白崎、懐からスタングンを取り出す。

春海、扉を開ける。外へ駆け出す。

○同・外廊下（夜）

逃げる春海。

追う白崎。

○同・階段（夜）

春海、階段を下る。振り向く。

上から飛び降りてくる白崎。

前に身を投げ出す春海。階段を転げ落

ちる。反動を使って立ち上がり、また

階段を駆け降りる。

足を止める白崎。

○同・正面入り口（夜）

春海、ふらつきながら道路へ出る。息

が荒い。崩れ落ちる。

夏美の声「兄さん？　兄さん！」

駆け寄る夏美。

朦朧とする春海。

夏美「兄さん！どうしたの！」

春海「夏美……、なんで」

夏美「兄さん！」

晴海の視界は朧げ。

夏美の後ろに人影。

春海「夏美、逃げる、逃げる……」

夏美「兄さん？ねえ、兄さん！」

海堂の声「おい！春海！」

海堂「海堂、春海の肩を掴む。」

海堂「何があった！」

春海「……広斗？スタンガン、人が……追

ってきて……」

春海、気を失う。

海堂の声「春海！」

夏美の声「兄さん！」

○病院・外観（夜）

○同・病室（夜）

ベットに座る春海。ガーゼを貼った額。

海堂、パイプ椅子に座る。春海にペッ

トボトルを渡す。

海堂「大丈夫か？」

春海「なんとか。マジでびっくりした……」

海堂「俺もびっくりしたよ。顔は見てねえん

だな？」

春海「見てねえ。身長は高かったな」

竹内、入室。

竹内「おう、生きてんな」

春海「竹内さん」

海堂「現場の方は終わったんですか」

竹内「大体な。非常線も張ってるがまだ見つ

かっていない。今日は家に帰れねえぞ、藤。

一日置いてもらうか署の方で待機」

春海「（項垂れて）了解です」

竹内「（自分の額を指さして）ったく。嫌な

所に付けられやがって。同じじゃねえか」

春海、苦笑。

春海「そーいや、妹は……」  
 竹内「俺が今から送っていくよ。心配すんな」  
 春海「（頭を下げて）すいません。妹を願  
 いします」  
 竹内「おう」  
 竹内、退室。  
 海堂「いつ帰ってきたんだ？ 妹。確か東京  
 にいたよな」  
 春海「先月。離婚したんだよ」  
 海堂「なるほど。なら今は実家か」  
 春海「そういうこと。あいつと鉢合わせしな  
 くて本当によかったよ」  
 海堂「まあ、一歩間違えたら巻き添え食って  
 ただろうからな。ところで話は変わるが、  
 その傷跡、的場優のと一致するか照合入れ  
 とけよ」  
 春海「（額を指さし）これか？」  
 海堂「ああ」  
 春海「……あの事件と同一犯だと思うのか？」  
 海堂「さあ。だが流行りの手法じゃねえん  
 だ。全くの別人が同時期に同一の手段を使  
 うか？ 確率は低いぞ」  
 春海、沈黙。  
 海堂「そういえば斉藤旭の件で再調査が決定  
 した」  
 春海「斉藤旭の？」  
 海堂「当時の遺体の記録から、防御創とも捉  
 えられるものが見つかった」  
 海堂、懐から写真を取り出す。  
 春海「……つまり自殺ではなく他殺の可能性  
 がある」と  
 海堂「斉藤旭の死亡時に取り調べを担当して  
 いた刑事は2名。途中斉藤がパニックを起  
 こし自傷行為。抑えきれず応援を呼んだが  
 間に合わず死亡」  
 春海「となると疑わしいのは担当刑事か」  
 海堂「担当していたのは枚方重蔵、権藤孝雄。  
 そして途中から応援として加わった……藤  
 原久」

春海、げんなりと天を仰ぐ。

海堂「（擲揄って）とんだ薮蛇だな。父の責任をとって辞職しますって言うか？」

春海「誰が言うか。なんで俺が」

海堂「そしたら養ってやってもいいぞ。旦那様と呼べ」

春海「（呆れて）お前、若い頃メイド喫茶に嵌ってたもんな」

海堂「若い頃はそういう冒険をするものだ」

春海「今は落ち着きましたみたいに言うんじゃないよ。警察学校からの付き合いだけど

な。俺の知る限りお前の人生に冒険がなかったことなんてねえよ」

海堂「妬いてるのか」

春海「（怒って）なんでそうなるのかなあ！」

春海「（動揺）おつまえ！」

海堂「最近してないよな」

春海、ぐっと詰まる。

病室のドアが突然開く。

夏美「そういえば兄さん！警察手帳……」

夏美「あ……ごめんね？」

夏美、床に警察手帳を置く。退室。

扉を見つめて固まる春海。

海堂「あ……ごめんね？」

海堂、バツが悪そうに椅子に座る。

○同・廊下（夜）

春海、そそくさと歩く夏美。首を傾げる竹内。

海堂の声「お前だって嫌がらなかった——」

晴海の怒号「黙れえ！」

○寺・墓地（全体風景）

○同・駐車場

駐車する覆面パトカー。

春海、車を降りドアを閉める。電話中。

春海「絶対連絡が来ると思ってたよ、俺は」  
年配女性の声「（ふざけて）待たせてごめん  
ね」  
春海「待ってない。待ってないよ、母さん」

○春海の実家・居間

千代香「ソファに座る千代香（67）。電話中。  
と。心配してたのよ。あんた一生独り身な  
のかしらって」

春海の声「……エロ本の場所がバレた時より

居た堪れないよ」

千代香「あつたわね！ そんなことも！」

春海の声「（溜息）」

千代香「夏美のことも、心配しなくていいか  
ら。あんたは自分のことをまず考えなさい」

春海の声「あいつ、上手くやってるの？」

千代香「大丈夫より。もう子供じゃないんだ

し。逆にあんたの方が心配だわ」

春海の声「俺……？」

千代香「（遠くを見て）父さんが死んで、あ

んなだけ早くに大人になっちゃったから。

結婚しないのだって、多分、母さんとおば

あちやんのいざこざをずっと近くで見えてき

たからでしょ」

春海の声「……それは」

千代香「多分そうなんだろうなって思ってた  
のよ」

○寺・駐車場

春海「春海、車に背を預ける。天を仰ぐ。

千代香「母さん、聞いていい？」

春海「なんで、父さんが死んだとき、家を出

なかつたの？」

千代香の声「……」

春海「ばあさんは、最後まで俺たちのことを

邪魔にしていた。実家の方だって、帰って来

いって言うてくれてたんだろ？」

○春海の実家・居間

千代香「千代香、目を伏せる。溜息。

方がよかつたのかしら。今思えば、そうした  
もあの時は、絶対にここを動かさなかつた  
たの」

春海の声「……なんで？」

千代香「だって」

千代香「千代香、視線を前へ。

千代香「戸棚に置かれた久の写真。

千代香「そうしたら今までのこと全部が、無  
かつたことになりそうだったから」

春海の声「無かつたこと……」

千代香「でも、それが正解だったのかわから  
ないわ。あんたたちは揃いも揃って家に寄  
り付かなくなっちゃって。夏美に至っては  
高校を卒業してすぐに飛び出して行っちゃ  
うし。結局、傍に残ったのはうるさいおば  
あちゃんだけ」

春海の声「……ごめん」

千代香「（笑って）あんたたちは悪くないわ  
よ。母さんだって、今またあのおばあちゃ

んと一緒にいらって言われたら無理だわ」

春海の声「（小さく笑って）だらうね」  
千代香「でも、あの時は、あの人が遺してく  
れた場所だから、捨てられないって思った  
のよ」

○寺・駐車場

春海「……春海、深く息を吐く。

春海「……父さんは、何か、ああなる前に前

兆とかあったの？」

千代香の声「そうね。今思えば少し精神的に  
不安定だったわ。丁度あんたと同じ年の子

供が殺された事件があつたでしょう？」

春海「ああ、駒沢の」

千代香の声「あの辺りから、ちよつとしたこ

とでも怒りやすくなつてね。だから、あ

んたが切欠つていうわけじゃないのよ。あ

つと他に何かあつたんでしょう」

春海「……春海、思案顔。  
千代香の「……遺書はなかったんだよね」  
たから」  
春海「そっか……」  
千代香の「ほら、暗い声出さない。しゃん  
としないと彼氏に捨てられるわよ」  
春海「母さん！」  
千代香の「（笑って）今度連れてきなさい  
よ。挨拶したいわ」  
春海、苦笑。

#### ○道路

路肩に駐車する黒いバン。

#### ○駐車

中のバンの車内

半分開いた窓。

隙間から見える春海の姿。

春海、通話を切り、歩き出す。

#### ○寺・

墓地・斉藤家墓前

掃除が行き届いている墓。

赤いリボンで束ねた4本の赤いガーベ

ラが供えられている。

両手を合わせる年配女性。

近付く春海。

#### 春海

「斉藤敦子さん、ですね」

斉藤敦子（66）、春海を見て会釈。

#### ○同・境内

敦子「並んで立つ春海、敦子。」

「発見したのは私です。2人で首を吊つ

ていて。テーブルの上に遺書が置いてある

のを見つけました」

春海「最後に会ったのはいつ頃ですか」

敦子「前の日です。旭の49日の法要があっ

たので」

春海「その時、お2人のご様子は？ 何かお

かしな様子などはありませんでしたか」

敦子「おかしいに決まっていますよ。だから心

配で様子を見に行っただです。……案の定でした」

敦子「春海、悲痛な表情で俯く。

「やあ、なんでも死んだのか。今更こんなこと言っても仕方ないけど……」

春海「……お察しします」

○空き家・斉藤家・外観

古びた2階建住宅。『斉藤』の表札。

○同・同・居間

敦子「実家でもありますから、私が管理をしています」

春海「室内を見渡す。

壁に貼られた数々の拙い絵。

花の絵。似顔絵のような男の子の絵。

父と母と男の子が手を繋ぐ絵。男の子

2人が手を繋いでいる絵。

春海「最後の絵を指さす。

春海「これは？ 友達ですか？」

敦子「確か、施設の職員さんじゃなかったかしら。年も近くて、まるでお兄さんみたい

に仲が良かったって聞いたことがあるみたいです」

春海「施設職員……確か、事件直前にはほとん

ど通所しなくなっていたと聞いています」

敦子「ええ。旭が嫌がっていたように……」

春海「思案顔。絵に視線を戻す。

絵の隣の壁紙が画用紙一枚分日焼けを

していない。

春海「（指さして）ここには何が？」

敦子「あら？ 同じように絵が飾ってあった

と思っただけ……おかしいわね。いつから

ないのかしら」

敦子「辺りを見渡す。

春海「屈んで畳を凝視する。

所々土が落ちている。

春海「敦子の足を見る。スリッパ。

春海「ここには、敦子さんの他に誰か訪ねてきたりしますか」  
敦子「まさか。私だけです」  
春海「立ち上がる。」

○同・廊下  
床を見ながら歩く春海。  
小さな土や石がある。

○同・トイレ  
春海「ドアを空ける。  
割れた窓ガラス。」  
春海「ここか」

○県警・資料室  
パソコンを見つめる海堂。  
モニタに映る藤原久の自殺現場の写真。  
海堂「思案顔。」  
写真が次々スクロールされる。  
突如廊下から響く喧騒。  
海堂「怪訝な顔。立ち上がる。」

○空き家・斉藤家・門前  
駐車するパトカー。  
警察官に説明する敦子。  
離れた所で電話する春海。  
春海「ああ。伊勢田町だ。侵入した形跡がある。今鑑識の手配を……え？」

○県警・廊下  
行き交う捜査官たち。  
九条「枚方です。駒沢冤罪事件の担当刑事だった枚方重蔵。訪問した制服からの報告で、玄関にピッキングの形跡あり。中は無人。ただ、寝室に血痕があったと。状態から見てもおそらく1週間は経過しているようです」  
春海「可能性は高いですね」  
九条「可能性は高いですね」

○空き家・斉藤家・門前  
電話する春海。難しい顔。

春海「他の担当刑事の安否確認は」

九条の声「権藤孝雄と松村玄司の自宅にはす  
でに人が向かってます。藤さんも、今から  
迎えに行くんでそこを動かないでください」

春海「怪訝な顔をする。」

九条の声「的場優の額にあった火傷痕と藤さ  
んのそれ、一致しましたよ」

春海「額の傷に手を添える。」

車のアクセル音が響く。

春海「振り向く。」

突進してくる黒いバン。

○県警・廊下

スマホから響く衝突音。

九条「藤さん！？ 藤さん！！」

○空き家・斉藤家・門前

道路に転がったスマホ。

頭から血を流して倒れる春海。

白崎「パーカーにサングラス、マスク

姿。春海を肩に担ぎ、バンに乗せる。」

屋内から出てくる警察官たち。バンに

駆け寄る。

白崎「バンに乗り込み急発進する。警

察官たちを振り切って逃走。」

○県警・捜査一課

騒がしい室内。話し込む近藤、竹内、

九条。

○県警・捜査一課

小走りで駆け込む海堂。

竹内「（海堂に手を挙げて）海堂！」

海堂「海堂、姿勢を正して呼吸を整える。」

近藤「悪いな、応援に来てもらって」

海堂「いえ、こちらも関わっているの。行

方はまだ掴めませんか」

竹内「使われたバンはパチ屋の駐車場に乗り

捨てられていた。監視カメラからは死角。  
よく計算してやがる」  
近藤「非常線にもかからん。範囲を広げた方がいいな」  
海堂「ところで、権藤孝雄、松村玄司も消息不明と聞きましたか」  
竹内「どっちも玄関にピング跡あり。ただし松村の方は室内でひどく争った形跡もある。外に逃げた可能性が……」  
霧島「霧島、駆け込む。」  
霧島「松村玄司、保護しました！」  
室内が騒然とする。

○同・小会議室

松村玄司（65）、震えながら椅子に座る。傷だらけ。

近藤、海堂、入室。

近藤「松村さん」

松村「近藤か……」

近藤、机を挟んで向かいの椅子に座る。

近藤「まさかこんな形でお会いするとは思っていませんでした」

松村「（自嘲し）ああ、そうだな……」

近藤「何があったんですか」

松村「強盗に襲われたんだ」

近藤「ただの強盗ですか」

松村「そうだ、それで揉みあいになって、隙

を見て窓から逃げて……」

近藤「では、犯人に心当たりはない、と」

松村「どういう意味だ」

近藤「向こうはあるようだ」

松村「（怪訝な顔で）何？」

近藤「枚方さんと権藤さんも行方不明です。枚方さんは1週間ほど前。権藤さんはおそらくあなたが強盗に襲われた時刻の前後で

しょう」

松村、驚いて顔を上げる。

近藤「それだけじゃない。あなたの先輩であった藤原久の息子、藤原春海。彼も、行方

不明です」

松村「（愕然と）そんな……」

近藤「この面々に心当たりは？」

松村「心当たりなんて、あり過ぎる。全員同

僚だろうが。何らかの事件で恨みを買って

……」

近藤「では、どの事件が一番に思い浮かびま

すか？」

松村「……近藤？ お前、何を」

近藤「……我々は、これが、25年前起きた

駒沢冤罪事件の延長線上にあると考えてい

ます。そしてそのトリガーは、斉藤旭の冤

罪発覚だ」

松村、愕然。

近藤「ご存じでしょうか。最近報道されてい

る3件の連続猟奇殺人事件。その被害者た

ちは皆、当時高槻昇と同じサッカーチーム

に所属していた。そして次は事件を担当し

ていた刑事たちが行方不明になった」

松村「（震えながら）あ……」

近藤「教えてください。あなたは、あなたた

ちは、何を、したんですか」

松村、深く項垂れる。頭を抱える。

近藤「……正直あなた方がどうなろうと私の

知った事ではない。だが私の部下は違う。

これは、次の代に負わせるべきものではな

い。あなた方の代で終わらせるべきものだ

った。違いますか！」

松村、堪え切れず叫ぶ。

○環状線道路（夜）

走行中の無数の車。

○走行中のバン・車内（夜）

運転する白崎。

後部座席足元に転がる春海。

春海、気付く。目を開く。朦朧。

運転する白崎。振り向く。スタンガン

を持った手を伸ばす。春海に当てる。

春海、悲鳴を上げる。再び気を失う。

○ 県警・捜査一課（夜）

話し込む捜査官一同。

近藤、戻る。

竹内「（歩み寄って）近藤さん」

近藤「（近藤、暗い表情。デスク前に立つ。）

近藤「（神妙に）……松村玄司が斉藤旭殺害

を自供した」

九条「……ちよつと待ってください。斉藤旭

殺害って」

霧島「自分から壁に頭を打ち付けて死んだん

じやないんですか」

近藤「……違う。当時の捜査官たちが、斉藤

旭に暴行を加え自供を促した。結果、取り

調べ中に斉藤旭は死亡した」

九条「もしかして、それに関与していたのが」

近藤「枚方重蔵、権藤孝雄、松村玄司、藤原

久の4名だ」

静まり返る室内。

近藤「皆も知つての通り、藤原春海は藤原久

の息子だ。当事者が死亡している現在、父

親の代わりに拉致された可能性が高い。ま

た、的場優の火傷痕と、先日襲撃を受けた

藤原春海の火傷痕が一致した。一連の犯行

は、同一犯とみてまず間違いない」

九条「固唾を飲む。」

近藤「斉藤旭の当時の交友関係をもう一度洗

い直せ！ それから検問や防犯カメラの解

析による逃走経路の特定！ 手遅れになる

前に急げ！」

竹内、九条、霧島、他捜査官一同、一

斉に動き出す。

九条、入口を通り過ぎる海堂を見る。

○ 同・廊下（夜）

海堂、早足で歩く。

九条の声「海堂さん！」

海堂、足を止める。振り向く。

九条「どこに行くんですか」

海堂「斉藤敦子にもう一度会う」

九条「斉藤旭の叔母ですね」

海堂「そうだ」

九条「一緒に行きます」

海堂「怪訝な顔で九条を見る。

九条「藤さんから聞いてませんか？ 自分、

結構役に立ちますよ」

海堂「（鼻で嗤って）糞生意気な後輩だとし

か聞いてないな」

九条「はあ！？」

海堂「行くぞ。アポは取ってある」

九条「（不満げに）……はい！」

○障害者施設『駒鳥の園』廃墟・居室（夜）

天井に吊るされたランタン。

床・壁・天井は剥き出しのコンクリー

ト。窓はセメントで塞がれている。

部屋の中央に倒れる春海。気が付く。

横になったまま辺りを見渡す。

春海「どこだ……」

春海、痛みを堪えながら上半身を起ここ

す。頭を抑える。手の平についた血。

遠くから男の悲鳴が響く。

春海、弾かれるようにドアを見る。

静寂。

春海、ふらつきながら立ち上がる。ド

アに近づく。耳を当てる。

再び聞こえる男の悲鳴。

春海、懐を探る。銃はない。

春海「勘弁してくれよ……」

春海、慎重にドアノブを握り、回す。

○同・廊下（夜）

床に点々と置かれたランタン。薄暗い

通路。塗装の剥げた壁紙・天井。

扉の隙間から左右を見渡す春海。

無人。

春海、警戒しつつ通路に出る。進む。

遠くから男の悲鳴。

春海、ランタンの前で屈む。持ち手の

針金を取る。足で踏み真つ直ぐに伸ばす。右手に握り、歩き出す。突き当りはT字路。春海、左右の通路を覗き込む。左手通路、10メートル先の扉から光。春海、乗れ出そうとする。入口から出てくる白崎。春海、慌てて身を引く。辺りを見渡す。後ろ右側に空室。中に駆け込み、屈む。近づく白崎の足音。何かを引き摺る音。通り過ぎる白崎。四肢のない死体を引き摺る。死体は老人男性。春海、そつと顔を出す。突き当りを右に曲がる白崎の姿。廊下は血の跡が続く。春海、静かに廊下に出る。白崎が来た道を辿る。T字路を左折。

○同・脱衣室（夜）

ランタンの灯に照らされた室内。奥に曇りガラスの引き戸。春海、引き戸へ近づく。

○同・浴場（夜）

慎重に開かれる引き戸。頭だけを出して覗き込む春海。天井に架かるランタン。大浴場跡。無人。奥に無造作に転がるスチールロッカー1つ。床は血まみれ。端に寄せられた鋸、鋏。切断された成人男性の手足8本。壁に貼られた8枚の写真。春海、中に入る。写真を見る。写真には佐々木、的場、吉村、藤原久。藤原久の写真の下に、春海の写真。他、年配の男性3名。（それぞれ『枚方』『権藤』『松村』と記名）

春海「これ……」

（フラッシュバック）

春海、調書を捲る。  
調書の担当者名「藤原久」「枚方重蔵」  
「権藤孝雄」「松村玄司」。

（フラッシュバック）

九条「一枚方です。駒沢冤罪事件の担当刑事だ。

「一枚方重蔵。訪問した制服からの報告で、  
玄関にピッキングの形跡あり。中は無人。  
ただ、寝室に血痕があつたと」

× × ×

春海「冤罪事件の担当刑事か……」

女の鳴咽。

春海、辺りを見渡す。

スチールロッカーから漏れる鳴咽。

春海、近付いて屈む。ロッカーの扉を  
掴む。施錠され開かない。

春海「おい、誰かいるのか」

ロッカーが微かに動く。

春海、背後を見る。

部屋の隅に置かれた鉄。

春海、針金をポケットに仕舞う。鉄を  
取る。扉をこじ開ける。

中には拘束された辻岡恵子（35）。

泣いている。痣だらけ。

春海「大丈夫か」

春海、恵子をロッカーから出す。

恵子「（震えながら）逃げて、逃げて……」

春海「落ち着いて。もう大丈夫だから」

春海「君の、名前は？」

恵子「つ、辻岡、恵子……」

春海「辻岡さん、いつからここに？ 誰に連  
れて来られた？」

恵子「じ、自分で、ついて来たの。それが、

恵子「じ、自分で、ついて来たの。それが、

わ、私の、罰だから……」

春海「罰……？」

恵子「わ、私、ここにいなきゃ、見なきゃいけない、あの時みたいに、ただ見てなきゃいけない」

春海「見るって、何を」

恵子「昇くんが、殺された時みたいに」

春海「昇くんが、息を飲む」

恵子「お願い、逃げて、逃げて……」

春海「恵子、春海に縋りつく」

恵子「待って、落ち着くんだ」

恵子「見たくない。もう見たくない。許して……！」

春海「落ち着いて。どういふことか、説明できる？」

○25年前・廃墟旅館・1階・宴会場跡

佐々木（10）、的場（10）、吉村

（10）、泣く恵子（10）を窓際に引き摺る。

恵子「声……私も、昇君と同じサッカーチームだった。佐々木君たちは、練習終りになる

といつも私か昇君を虐めてきて、その日は私の番だった」

恵子「ロッカーに閉じ込める佐々木、的場、吉村。鍵をその場に捨てる。笑

いながら窓枠を上り外へ出る。泣く。恵子「声……でも、昇君が助けに来てくれて」

昇「ロッカーに駆け寄る昇。待って、今出してあげるから」

昇、鍵を拾い開けようとする。窓から様子を窺う佐々木。ムツとした

顔。中に戻ろうとする。的場「（佐々木に向けて小声で）おい、待て」

佐々木「あいつ……」

○25年前・同・同・ロッカー内

泣きじゃくる恵子。

換気口から見える外の様子。

鍵を開けようとする昇。

背後に立つ人影。

恵子、両手で口を抑える。

稲垣紘一（40）、昇を襲う。

恵子、震えながら凝視。

稲垣、恍惚とした表情。

昇、虫の息。恵子を見る。

昇「小さく」たすけて」

昇、絶命。

恵子、小さく悲鳴を漏らす。

稲垣、ロツカーを見る。近付く。

恵子、震える。

佐々木、的場、吉村の悲鳴。逃げる足音。

稲垣、動揺。挙動不審。逃げ去る。

ロツカーから這い出る恵子。

中央に置かれた昇の死体。顔は自分に

向いている。

恵子、震えながら逃げる。

○現在・障害者施設『駒鳥の園』廃墟・浴場（夜）

嗚咽する恵子。

恵子「そのまま、そのまま私、誰にも言わな

かった。言えなかった。見殺しにしたから、

ずっと言えなかった。25年も：犯人が

違うってことも」

春海「：君は、斉藤旭が犯人じゃないとわ

かっていたのか。25年前から、ずっと」

春海「ついて来たって言ったね。誰に、つい

て来たんだ？」

恵子、春海を見上げる。

晴海の背後に立つ白崎。手に包丁。

恵子「（白崎を見て）：秀龍」

春海、ハッと振り向く。

包丁を振り下ろす白崎。

○住宅街（夜）

走行する覆面パトカー。

○走行中の覆面パトカー・車内（夜）

運転する海堂。

九条「なら、枚方が権藤と藤原久に自殺説を

提案し、松村も隠蔽に手を貸したと？」

海堂「らしいな」

九条「藤さんは、そのこと……」

海堂「知らなかっただろうが、薄々怪しいとは思ってただろうな」

九条「どういうことですか」

海堂「前に言ってたことがある。ガキの頃に将来の夢を聞かれた。警察官になって犯人をぶん殴るって答えた。そしたら急に親父がキレだして殴られた。そのまま家に帰ってこなくなってる、自殺した。……10歳の頃だ」

九条「それって……」

海堂「斉藤旭が死んだ時期だ」

九条「（溜息）……自分がやったことの罪悪感に耐えきれず、ってやつですかね」

海堂「（苦々しく）馬鹿な父親だ」

○空き家・斉藤家・門前（夜）

門前に立つ敦子。

目の前に駐車する覆面パトカー。

降りる海堂、九条。

敦子、歩み寄り会釈。

敦子「すいません。来ていただいて」

海堂「いえ、こちらこそ遅くにお時間を頂いてすいません」

○同・同・居間（夜）

入室する海堂、九条。室内を見渡す。

壁に貼られた絵を見る。

海堂「画用紙一枚分日焼けをしていない部分を見る。」

海堂「ここにあった絵がないと」

敦子「そうです。それで藤原さんが空き巣に

気付いてくださったって……。実はあれから、

他に盗まれたものがないか確認していたん

です。そこで旭の日記があることを思い出

して……。」「

九条「日記、ですか」

敦子「領いてテーブルの上を見る。」

古びた日記帳。赤いリボンで束ねた4

本のガーベラ。

敦子「日記帳を差し出す。」

海堂「受け取る。」

海堂「今まで中を見たことは？」

敦子「ありません。兄夫婦の自殺の後に畳の

下から偶然見つけて……。読む気になれず、

ずっと仕舞っておいたんです。それで、さ

っき初めて目を通してみたんですけれど。そ

したら……。」「

敦子「沈痛な面持ち。俯く。」

海堂「海堂、日記を読み始める。顔を顰める。」

海堂「これは……。」「

○ 齊藤 旭の日記  
以下、鉛筆書きの手記。

「ヒデお兄ちゃんといっしょにおさん

ぽした」

「ヒデお兄ちゃんとおんぶしてくれた」

「ヒデお兄ちゃんがかわいいっていつ

た」

「ヒデお兄ちゃんがキスした」

「ヒデお兄ちゃんが体中をさわった」

「ヒデお兄ちゃんがいっしょにくらそ

うっていった。ふたりきり。ぼくはパ

パとママといた。しよにいたっていつ

たからおこった。こわい」

「ヒデお兄ちゃんがかっこいい。うっ

ていった。ぼくをはだかにした。おこ

った。わいから。おとなしくした。おこ

「おしりがいたい。もう行きたくない。赤

「ヒデお兄ちゃんがお花をくれた。赤

い花。ヒデオ兄ちゃん。えらんだ。ちか  
いの花。なんだ。って。」「  
「ヒデオ兄ちゃん。が。パと。ママ。にあ。い  
さ。つ。し。た。い。っ。て。い。っ。た。ほ。つ。よ。う。な。ん  
だ。っ。て。ぼ。く。は。あ。っ。て。ほ。し。く。な。い。ま  
た。ぼ。く。を。は。だ。か。に。し。た。あ。っ。ち。こ。っ。ち  
な。め。る。こ。わ。い。」「  
「パパ。に。行。き。た。く。な。い。っ。て。い。っ。た。な  
ん。で。っ。て。き。か。れ。た。い。っ。て。え。な。か。っ。た。で  
も。い。か。な。く。て。い。い。っ。て。」「  
「ヒデオ。兄。ち。や。ん。か。ら。で。ん。わ。き。た。っ。て。  
来。週。行。く。？。っ。て。マ。マ。が。聞。い。て。き。た。い  
や。だ。い。か。な。い。」「

○空き家・斉藤家・居間（夜）

海堂「この『ヒデオ兄ちゃん』という人物に

敦子「施設の職員です。旭が昔、あそこの絵  
を。描。き。な。が。ら。教。え。て。く。れ。て。」「

海堂「男の子2人が手を繋いでいる絵。  
敦子「旭さんのご両親はこのことは……」

海堂「知っていたかどうかわかりません。旭  
が施設に行きたがらない、と言う話は聞い  
ていました。……」

九条「お葬式などです。……」

敦子「なかつたと思います。ただ、ずっと不  
思議に思っていたことが」

九条「敦子、テールブルの上のガーベラを見  
る。」

敦子「あの花。毎年お墓に供えられてい  
る。」

海堂「25年間ずつと。今までは、誰が供  
えてくれたのか。あまり気にせずいた  
んですけ……」

海堂「日記にあった『誓いの花』ですか」

敦子「怖くなつて……」

九条、スマホを操作する。

九条「海堂に向けて小声で」4本のガーベ  
ラの花言葉は、『あなたに一生の愛を捧げ  
ます』だそうです。：：：近隣の花屋に聞き  
込みした方がよさそうですね」

海堂「手配頼む」

九条「了解です」

海堂「敦子に向けて」旭さんが通所してい

た施設の名前はわかりますか」

敦子「駒鳥の園です。ここから山手に向かつ

た所にあつて、車で30分程の場所にある

ました。今はもう閉園して、ただの廃墟に

なっています。：：：」

敦子「戸棚を漁る。古びたパンフレッ

トを取り出す。

敦子「これが、当時の園のパンフレットです」

海堂「広げてみる。

施設の外観がプリントされたパンフレ

ット。

○障害者施設『駒鳥の園』廃墟・外観（夜）

外から明かりは見えない。

○同・浴場（夜）

包丁を振り下ろす白崎。

避ける春海。白崎に向き直る。

春海「：：：見覚えがあるな。お前の背格好」

白崎「春海に向けて微笑む。恵子の傍

に屈む。

恵子「嗚咽を堪えて震える。

白崎「もう、聞いたかい？」

春海「何を？」

白崎「恵子に手を伸ばす。頭を撫でる。

恵子「小さく悲鳴。

白崎「彼女の懺悔だよ」

春海「高槻昇の殺害時、そのまま逃げてしま

ったことは聞いた」

白崎「他には？」

春海「（窺うように）：：：他について？」

白崎「恵子の顔を掴み、爪を立てる。

恵子「ひ……っ」

春海「おい、やめろ！」

白崎「他には？」

春海「舌打ちして……斉藤旭が犯人では

ない。と知っていた。いながら黙っていた。」

白崎「正解だ。そのくせ冤罪が明らかになっ

た。途端に旭の墓参りに訪れたんだ。被害者

面をしてね。」

恵子「ち、ちが……っ私、私そんなつもりじ

や！」

白崎「白崎、恵子の頭を床に叩きつける。」

春海「お前の目的は……斉藤旭の復讐か。」

白崎「……そんなものはね、もう何の意味も

ないんだよ。だってもう、あの子はいない。

どこにも、どこにも、どこにも……！」

白崎「恵子の頭を何度も叩きつける。」

恵子「絶叫。」

春海「やめろ！」

白崎「白崎、包丁を向けて春海を制する。」

白崎「（焦点の合わない目で）愛していたん

だ、旭を愛していた。結婚の約束だってし

ていたのに。」

春海「結婚……？」

白崎「しばらく会わないうちにあんな犯罪を

起こして。5年もの間、ずっと、ずっとそう思

っていた。でも忘れられなくて……冤罪

だとわかった時、まず自分を責めたよ。な

んで信じてあげられなかったんだらうって。」

春海「……」

○回想・斉藤家墓前

墓前に置かれたガーベラ。

合掌する白崎。

恵子の声「あの……」

白崎「振り向く。」

恵子「白崎の背後に立つ。」

白崎「えっと、君は……？」

恵子「（緊張し）あ、あの、私……子供の頃、

齊藤 旭さんの家の近所に住んだ者で」

白崎 「近所……？」

恵子 「はい、あの、うんと子供の頃に、仲良くしてもらったので、お墓参りをおもって」

恵子 「も、もしかして、親戚の方、ですか？」

白崎 「躊躇いがちに……いいえ。僕は、彼が通った施設の職員です。僕が担当で、仲がよかったので」

恵子 「（ホッとして）あ、ああ。施設の……」

白崎 「あの……」

恵子 「は、はい」

白崎 「よかったら、旭の話を、聞かせてもらえませんか」

恵子 「え」

恵子 「真摯に見つめる白崎。」「（嬉しそうに微笑う）わかり、ました」

白崎 「（嬉しそうに微笑う）ありがとうございます」

○回想・公園

白崎 の声「手を繋ぎ仲良く歩く白崎、恵子。言って、旭のことはほとんど話してくれな

かった。それでもよかった」

白崎 の声「これ、きつと旭が繋いでくれた縁だ。僕が1人にならないように彼女と巡り合

わせてくれたんだ。そう思っていた。真相を知るまで」

○回想・白崎のアパート・居間

床に座り込んで俯く恵子。

白崎 「……全然と立ち尽くす白崎。」

恵子 「本当に、本当にごめんなさい。でも、結婚前に全部話しておきたくて……」

白崎 「じゃあ、旭とは何の面識も……」

恵子 「小さく頷く。」

恵子「（泣きながら）……旭さんには、一度も会ったことがないの。ただ、彼は冤罪を着せられたまま死んでしまった。私が、通報していたら、こんなことにはならなかった。だから、だから、せめてお墓参りだけでもと思つて、それで――」

白崎「お、ま、お前……お前……！」

恵子「（怯えて）ひ、秀龍……？」「

白崎「お前が、お前が、お前が……！」

白崎「（泣き叫びながら）お前が、言っていれば……！」

○現在・障害者施設『駒鳥の園』廃墟・浴場（夜）

白崎「何が縁だ、何が巡り合わせだ。そんな

ありもしないものに縋つて、また旭を裏切るところだった」

白崎「恵子、床に押し付けられて呻く。」

白崎「旭はいない、もういないんだ。誰が悪

い？ 全部だ！ 殺された高槻昇も、殺し

た稲垣も、原因を作った佐々木も、的場も、

吉村も、こいつも！ みんないなければ旭

は死ななかった……！ 旭が犯人に仕立て

上げられることもなかった……！ 殺されるこ

とだつてなかったのに……！

白崎「包丁を恵子の側頭部に刺す。」

春海「やめろ！」

恵子「痙攣。絶命。」

白崎「白崎、立ち上がる。目が虚ろ。」

白崎「僕だけが、僕だけが旭を守つてあげら

れた。僕だけが、彼を愛していたのに……」

春海「白崎、後退る。」

白崎「僕らを引き裂いた。僕と、旭を、お前

らが……！」

春海「白崎に襲い掛かる白崎。乱闘。」

白崎「春海、揉みあう。」

白崎「春海、揉みあう。」

白崎「春海、揉みあう。」

春海、包丁が腹を霞める。倒れる。  
白崎、馬乗りになる。左手で春海的首  
を絞め、頭上に包丁を掲げる。  
春海、ポケットから針金を取り出す。  
白崎の左目に刺す。  
白崎、悲鳴。後ろに倒れる。  
春海、逃げる。  
遠ざかる足音。  
白崎、蹲って呻く。絶命した恵子と目  
が合う。笑い出す。  
白崎「恵子に向けて」大丈夫、お前も後で  
飾ってあげるよ。僕たちの誓いの花に」  
白崎、立ち上がる。出口へ向かう。

○環状線道路（夜）  
猛スピードで走る覆面パトカー。

○走行中の覆面パトカー・車内（夜）  
運転する海堂。

九条「そうです。環状線を抜けて山間に進ん  
だところにある駒鳥の園という障害者施設。  
確か今は廃屋になっているはずですよ。いえ、  
確証はないですが、念のために、はい」  
九条、電話を切る。  
九条「応援をやって見に行かせるそうです」  
海堂「そうか」  
九条「僕たちは一旦署に戻りましょう。あの  
日記やガーベラも鑑識にかける必要があります」  
ます」  
九条、バックシートを見る。

海堂「後部座席に置かれた日記とガーベラ。  
何言ってるのかわかんねえな」

九条「アクセルを踏み込む海堂。  
「ちよ！海堂さん！」  
前方を睨む海堂。」

○障害者施設『駒鳥の園』廃墟・廊下（夜）  
背後を気にしながら走る春海。  
前方に大きい扉。床に引き摺った血痕。

○同・食堂（夜）

扉から覗く春海。

窓はセメントで塞がれている。

部屋の中央に2人の老人男性遺体。

赤い花を描いたように手で伸ばされた

血痕の中心に置かれていて。手足は切

断され芋虫のよう。

春海「（うんざりと溜息）これのどこが復讐

じゃないって？」

風の音。

春海、辺りを見渡す。

奥に扉。『第2談話室』のプレート。

○同・第2談話室（夜）

扉を開ける春海。

吹き込む風。

天井に掛かったランタン。揺れるカー

テン。

春海、カーテンを捲る。

春海「ここが、出入り口か……？」

春海、振り返り室内を見る。息を飲む。

右側壁一面に描かれた斉藤旭の似顔絵。

周りに描かれた複数の赤いガーベラ。

春海「斉藤、旭……」

春海、しばらく見つめる。

壁画下に置かれた画用紙。風で揺れる。

春海、近寄って画用紙を手取る。

男の子2人の絵。片方の男の子は赤い

花で顔が塗りつぶされている。赤い花

を手に持ち、相手に差し出している。

花を差し出された男の子は笑いながら

泣いている。

（フラッシュバック）

白崎「包丁を向けて春海を制する白崎。

だ、旭を愛していた。結婚の約束だったし

ていたのに」

× × ×

春海「春海、画用紙を撫でる。」

白崎「……約束していたわりには」

白崎の声「それに触るな！」

○同・正面入り口・外（夜）

正面に滑り込む覆面パトカー。

降りる海堂、九条。

響く銃声。

九条「今の、銃声ですか」

海堂「舌打ち。正面玄関に駆け込む。」

板で塞がれた入口。

海堂「板を蹴り上げ、筆り取る。」

板が割れ、中のセメントが見える。

海堂「（板を投げ捨て）糞が」

九条「パトカー！無線で応援を呼ぶ。」

海堂「海堂、辺りを見渡す。」

海堂「春海……」

○同・第2談話室（夜）

床に倒れる春海。脇腹から流血。

白崎「白崎、画用紙を拾う。春海の頬を蹴る。」

春海「ぐ……！」

白崎「汚れたらどうするんだ」

白崎「これは旭が描いてくれた絵なんだ。わ

かるかい？ 僕がプロポーズした時の絵だ。わ

旭が描いて、飾ってくれていたんだよ。世

界に一つだけの、尊いものなんだ。お前

たいな汚らしい奴が触れていい物じゃない

お前みたいなの、お前みたいなの、汚らしい奴

が……！」

白崎「息を乱す。動きを止める。」

春海「ぐったりする。」

白崎「膝を折る。春海の前髪を掴んで

持ち上げる。視線を合わせる。」

白崎「ねえ、君は知っていたかい？ 自分の父親が最低な人殺しだったことを」  
 春海「何：：？」  
 白崎「枚方が吐いたよ。旭は自死したんじゃない。殺したのは枚方と権藤。その隠蔽に手を貸したのが藤原と松村」  
 白崎「その様子じゃ、勘づいてはいたみたいだね」  
 春海「：：」  
 白崎「なら、その父親も実は殺されていたってことは、知っていたのかな」  
 春海「（目を見開いて）は：：？」  
 白崎「（鼻で嗤って）事件が終わってから藤原が自首すると騒ぎ始めたらしいよ。だから藤原残りの3人が自殺に見せかけて殺した。練炭で。口封じってやつさ」  
 春海「：：それ、枚方が言ったのか」  
 白崎「そう」  
 春海「：：なんで奴が冤罪事件に関わっていたことがわかった。テレビでも担当刑事の実名報道はしていなかったはずだ」  
 白崎「簡単だよ。あの事件を模倣して佐々木たちを殺せば、おのずと25年前に関連付けて警察の接触があると思ってる」  
 春海「：：後を、尾けたのか」  
 白崎「（笑って）どんな形であれ旭を死に追いやったのは事実だからね。生かしてはおけないと思ってる。でも蓋を開けてみたら本当に殺されていた。躊躇わずにいてよかったよ。後少しで見逃すところだった」  
 春海「斉藤旭に危害を加えた人物。その起因となった人物を1人残らず殺す。それがお前の目的だったんだな」  
 白崎「当たり前だろう？ 僕だけが、旭を守ってあげられる。僕だけが、これから、この先も、ずっと」  
 春海「白崎、春海に向かって銃を構える。」  
 春海「：：この先って？」

春海「お前はここで俺を殺して、その後はどうするつもりだ？」  
 白崎「まだ松村の始末がついてないからね。そつちに取り掛かるさ」  
 春海「松村を殺した後は？ 斉藤旭の後を追うのか」  
 白崎「（笑って）……まさか、ドラマみたい」  
 春海「『死ぬな』とでも言うつもりかい？」  
 白崎「（斉藤旭が嫌がりそうだなと思って）「陰しい顔で」……どういう意味だ」  
 春海「別に。結婚の約束をしていたって言う割には、あんまりいい扱いじゃねえなと思うって」  
 春海、白崎が握る画用紙を指さす。  
 白崎「……：そんなことはない」  
 春海「ならなんで、顔が塗りつぶされているんだ？ 花を渡してるのはお前だろ」  
 白崎「これは僕たちの誓いの花だ」  
 春海「ならなんで、渡された斉藤旭は泣いてるんだ」  
 白崎「泣いていない」  
 春海「泣いているだろ」  
 白崎「笑っているだろ！」  
 春海「でも泣いてるだろ！」  
 白崎「違う！ 喜んで泣いているんだ！」  
 春海「ならなんで、事件直前には施設に行かなくなつた！？ テメエが1人で勘違いして嫌われたからじゃねえのか！？」  
 白崎「うるさい！」  
 白崎、発砲。  
 春海、左肩に被弾。  
 白崎「僕たちは愛を誓ったんだ。何度も何度もこの施設で。結婚の約束だってした。ご両親に挨拶に行く約束だって……！」  
 春海「（荒い呼吸で）……：なら斉藤旭はどう答えたんだ？ テメエはさっきから自分の考えばかりで、それに斉藤旭がどう答えたかなんて一言も言っていない。斉藤旭は

お前になんて答えたんだよ。返事したのか、  
 嬉しいとでも言ったか？ 言ってみろよ！  
 白崎「旭は上手く話せなかった！ だから僕  
 がそれを汲み取ってあげたんだ！」  
 春海「それが正しいと？」  
 白崎「なんだと……！」  
 春海「泣いてるだろ！ 受け取ってねえだ  
 ろ！ 要らなかったからじゃねえのか！？  
 お前はただ押し付けたんじゃねえのか！？  
 自分の欲を！ 斉藤旭に！ 押し付けて押  
 し通した結果がその絵じゃねえのか！？  
 彼にお前は要らなかった！ お前の愛なん  
 か要らなかったんだよ！」  
 白崎「違う！ 違う違う！ 旭には僕が  
 いればよかった！ 旭には僕の愛だけあれ  
 ばよかったんだ！」  
 白崎「銃を捨て春海の首を絞める。  
 春海、呻く。白崎の脇腹を殴る。  
 白崎、横に倒れる。  
 春海、銃に手を伸ばす。  
 白崎、春海を横になぎ倒す。床の銃を  
 とる。構える。  
 春海、顔を伏せる。  
 銃声。  
 白崎、胸に被弾。後ろに倒れる。  
 カ―テンが外から開く。  
 銃を構えた海堂。中庭から侵入する。  
 九条、竹内、霧島、他捜査官たち、次  
 いで窓から侵入。  
 竹内「確保しろ！」  
 白崎、取り押さえられる。叫ぶ。  
 海堂「おい、春海！」  
 九条「救急車！ 急げ！」  
 春海、ぎこちなく顔を上げる。気の抜  
 けた顔。広斗を見る。  
 春海「……惚れ直しちゃうよ、ハニー」  
 海堂「（噴き出して）そうだろ、ダーリン」

○障害者施設『駒鳥の園』廃墟・外観（夜）

複数のパトカーが取り囲む。  
周辺や屋根の上を行き交う捜査官たち。

○病院・外観

○同・病室

春海、ベットで新聞を読む。

九条、パイプ椅子に座る。膝にフルー

ツ籠。

九条「え、言ってみただけ？」

春海「うん」

九条「いやいやいや、嘘ですよ」

春海「嘘じゃねえよ。そもそも俺、斉藤旭の

日記とか見てねえもん」

九条「いや、だって、物凄い堂々と『彼にお

前の愛なんか要らなかったんだ』って言っ

てたじゃないですか。だからてつきりあの

2人の本当の関係を知った上でかと……」

春海「あいつがあんまり、旭、旭ってうるせ

えから。実は嫌いだったとかいうことにな

ったら動揺して隙が生まれるんじゃないか

と思っ

九条「それでとりあえず言ってみたと」

春海「そうそう。そうしたら思いのほか反応

が激しかったもんだから」

九条「それで撃たれちゃったと」

春海「そうそう」

九条「そうそうじゃないですよ……！」

九条「そうそう。リンゴを持つ。春海の額にぐり

ぐり押し付ける。

春海「いたたた！　こら！　リンゴを凶器

に使うんじゃない！」

九条「まったく！　生きた心地がしませんで

したよ！」

春海「春海、苦笑。リンゴを受け取る。齧る。

九条「相変わらずです」

○同・ICU

九条の声「今時口の中に毒薬を仕込むなんて

ができませんでした。命に別状はありません。胃洗浄も安定し、一時は意識の回復も見られました。容態

た。しかし……」

白崎「薄っすら目を開ける。

齊藤「旭、目の前に立つ。

白崎「目を見開く。動き出す。体を起

こす。点滴や管を耄り取る。

心拍計からエラー音。

旭「背を向ける。逃げる。

白崎「あさひ、あさひ……旭！」

白崎「追いかけようとする。

医師「看護師、駆け寄る。抑える。

白崎「どこへ行くんだ！旭！どうして逃

げるんだ！なんでだ！旭！旭！」

旭「壁に消える。

旭「叫ぶ。

九条の声「幻視の兆候が見られ心神喪失状態です」

○病院・病室

春海「春海、リンゴを齧る。

春海「斉藤旭の幻覚、か。そんなんじゃあ、

まともに話ができるかどうか」

九条「僕は藤さんのせいだと思いますね」

春海「僕、噎せる。

春海「お前……もうちょっと傷付いた先輩

に優しくしようよ」

九条「さあ、自分は糞生意気な後輩なんです。

そんな配慮は持ち合わせていませんね」

春海「ん？」

九条「ん？」

春海「……ん？」

九条「春海をじっと見つめる。

春海「目を逸らしてリンゴを頬張る。

九条「やつぱり！言ってたんですね！僕

のこと糞生意気な後輩だって！」

九条、オレンジを掴み春海の額にぐりぐり押し付ける。  
 春海「待て待て待て！ まだこれ食べ終わってないから！」  
 九条「誰が食べていいって言いましたか！」  
 春海「俺の見舞いじゃないの！？」  
 海堂「入室。」  
 海堂「賑やかすぎるぞお前ら」  
 春海「おお、お疲れ」  
 九条「（咳ばらいをし）お疲れ様です」  
 九条「フルーツ籠をサイドテーブルに置く。立つ。」  
 九条「では、僕はそろそろ失礼しますよ」  
 春海「おお、ありがとうな」  
 海堂「もういいのか」  
 九条「海堂の脇を通り過ぎる。」  
 九条「（海堂に向けて小声で）流星にそこまで鈍くないですよ僕は」  
 海堂「（笑って）：何言ってるのかわかんねえな」  
 九条「小さく笑う。退室。」  
 春海「（食べかけのリングを翳して）お前も食うか？」  
 海堂「せめて食いかけ以外をよこせ」  
 春海「１個丸々はちよつと多いな。そろそろオレンジにいきたいんだよ俺は」  
 海堂「しょうがねえな」  
 広斗、苦笑。枕元に腰かける。春海からリングを受け取る。  
 春海、広斗を見つめる。  
 春海「どした」  
 海堂「（リングを齧り）何が」  
 春海「なんか優しくねえ？」  
 海堂「俺はいつでも優しい」  
 春海「（わざとらしく）え、やだ、この人なんか変な事言ってる」  
 海堂「肩を落として溜息。」  
 春海「おいおいおい、本当にどうした。あ、そうだ。今日はお勧めの雑誌ないのか？ 今なら暇だから――」

海堂「……引き出し開けてみるよ」  
 春海「嘘だろ！？」  
 海堂「嘘だ。馬鹿」  
 春海「（脱力して）お前な……」  
 春海「海堂、力無く笑う。俯く。」  
 春海「……広斗？」  
 海堂「……今回ばかりは、駄目かと思った」  
 海堂「見つかからねえし。連絡もつかねえし。非常線にもひつかからねえ。もう死んじまっただらうかと思っただらうか」  
 春海「悪い。広斗。心配かけた」  
 海堂「雑誌も、もう見なくていい」  
 春海「え」  
 海堂「……どうしても嫌なら、家は諦める」  
 春海「広斗……？」  
 海堂「別に、俺が居座ればいいだけだし。生きてれば別に、どこに住んでようが関係ねえし。一緒にいられば、それでいい。だから、無茶だけはするな。もう二度と」  
 春海「……海堂、春海を見つめる。」  
 海堂「……当たり前だろ……」  
 春海「……春海、小さく笑う。」  
 春海「……家を、建てるかって話になってから、ずっと思ってた。父さんが死んだ時、玄関で呆けてた母さんみて、いっつか俺もなるんじゃないかって。それで、1人残されて、俺だけその家にいることになった。嫌だ。俺たち子供も作れねえし。」  
 海堂「結局、それ以外何にも残らない」  
 春海「……でも、家があるが、なからうが、結局お前に同じ思いをさせるところだったんだな……」  
 春海「……」  
 肝心な所で意見が合わないっていうか」

海堂「（怪訝な顔）なんでそう思う」  
春海「（苦笑して）俺は今、欲しいよ。家」

海堂「あんなに嫌がってたくせに、どんな心境の変化だ」

春海「（照れ臭そうに）んゝ、まあ、色々？」  
海堂「（苦笑）ったく。ゝゝ仕方ねえから、折れてやるよ」

海堂「お、おいゝゝ」  
春海「お、おいゝゝ」

海堂「随分してないよな」  
春海「ぐっと詰まる。」

病室のドアが突然開く。

夏美「顔を出す夏美。」

虎太郎「お見舞いにきたよ兄さん！」

夏美「あゝゝゝごめんね？」  
虎太郎「あゝゝゝごめんね？」

夏美「虎太郎の目をそつと塞ぎ、退室。」

海堂「あゝゝゝごめんね？」  
海堂「あゝゝゝごめんね？」

海堂「あゝゝゝごめんね？」  
海堂「あゝゝゝごめんね？」

○同・廊下  
夏美、虎太郎を抱えて逃げる。

春海の怒号「広斗おお！」

海堂の怒号「お前だって嫌がらなかったー」

晴海の怒号「もう本当に黙れお前！」

旭が手に抱えた本。

タイトルは「Who killed  
Cock Robin」  
了